

特集

縁蔭図書紹介

絵本と子ども 遊々

村石昭三

に心の涼しさを見、さらに「日かけ」の題で、

…日盛りの中を駆けまわって、その広い明るい光線に、ぐんぐんと活気をあおり立てられる子どもが、ふと、涼しい木かげに来て、にっこりと、なごやかな顔を見せることがある。

「緑陰」の言葉で思い出したのは、私が幼児教育にかかるようになつた四十年ほど前、手にした倉橋物三著『育ての心』（フレーベル館）の次の一節でした。題は「涼しい顔」。
…熱風裡に居て熱を知らず、汗にぬれて汗を知らぬ幼児の顔。今鳴いている一匹の蝉をねらつて、万象無に帰せる幼児の顔。（後略）

として、「子どもには一ぱいの日なたと共に、静

かな日かげも与えてやりたい。」と保育論に照応させています。

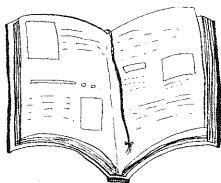
さて、日かげ、緑蔭といえば、絵本などは子どもに好適でしょう。

私は絵本や童話の世界に遊ぶ子どもの姿を追うのが大好きです。その姿を話の主人公にしたのが

クロケット・ジョンソン作『はるるどと むらさきの くれよん』（文化出版局）です。

あるばん、はるるどは ふつと つきよのさんぽが したくなつた。

という出だしで始まり、「さんぽが したくなつた」から、クレヨンで線を引いて、道を描く。独り



言のように、月夜の散歩だから月を描く、というようにして、絵本の中で、はるるど坊やの遊々が始まるのです。子どもが絵を描き、言葉を話す楽しみ、また、絵本に遊ぶ楽しみも、はるるど坊やのよう、先へ先へと想いの世界を広げていくことと同じではありませんか。

家庭でも、絵本の読み聞かせをすると、今見ているページより先のページを見たがつて首を曲げ、のぞこうとするしぐさに気づかれたことがあるでしょう。

子どもは話の先を創造するのが大好きです。

ずっと以前、小学館の雑誌『幼稚園』で、言葉のテスト欄の作成にかかわった時でした。子どもが話の先をどのように創つたか、「もし、あなたが○○だったら」の問い合わせです。話題は、イソップの『牛とかえる』です。「あなたがかえるの子どもだったら、おなかが破けてしまつたお母

さんがえるを見て、どうしますか」の問い合わせを用意しました。答えは、「チチン、ブイブイする」「赤

チンをつける」など、たくさんありました。

このように、子どもはどんな話の世界に遊んだか、どんな話の先を創ろうとするかに視点をおいたのが、イタリアのJ・ロダーリ『ファンタジーの文法』(筑摩書房)という本です。小学生の指導のように、話をもとに戻して理解を尋ねると違つて、幼児には、次はどうなるかと、先に想いを進めるところに、ファンタジーの世界が広がると考えたのが、児童文学者ロダーリだったのです。

ロシア民話『おおきなかぶ』(福音館書店)の絵本では、文は「やつと、かぶはぬけました。」で終わっていますが、表紙の絵は、かぶをかついで運んでいますね。文の読み聞かせが終わったら、「このかぶは持つて帰つて、どうしたんでしょうね」という口添えもいい。

話の途中で、あなたならどうするかと、問いかける試みもあります。

ある園で、レオ・レオニ『スイミー』(好学社)の絵本を扱った公開保育がありました。智慧と勇気のある小さな魚スイミーが仲間の魚たちと力を合わせ、大きな魚に立ち向かうという話です。そして、読み聞かせが進んで、「そのとき、いわかげに、⋮」と文があり、「だけど、いつまでも、そこにじつと してゐるわけには いかないよ。」とスイミーが言う。これからどうやつて、まぐろを追い出すかを考えるところで、保育者は「みんなだつたら どうするか」と質問をしたのです。すると、子どもたちがいろいろ言う言葉に混じつて、

A児 包丁デ チヨンギツチャウ。

B子 魚ガ ソンナコト デキヤシナイ。

のやりとりがありました。A児は人間のままの

目。B子は自分を小さな魚に見立てた目で、話の先を考えている。この違いなのですね。

別の出来事。誰よりも話の先を早く見たいと、行動に移した子がいました。「こぞつこ まだだが」（新世研）は、方言まじりの文で、「さんまいのおふだ」でも知られる東北地方の民話。寺の小僧さんが和尚さんから三枚のお札をもらつて旅に出るが、泊めてもらつた宿で、鬼ばばに見つかる。逃げ出そうと便所の柱にお札をはつて、鬼に「こぞつこ まだだが」と聞かれたら「まだだ」と言つてくれと、頼んで逃げ出す場面にきました。

最後に紹介するのは、赤ちゃん絵本と呼ばれる、ディック・ブルーナの『ちいさな うさこちゃん』（福音館書店）。「なぜ、うさこちゃんはいつも前を向いているの?」「それはね、赤ちゃんの右手側に立つて、絵本をのぞきこんだのです。

この子の行動は、なぜ? というと、後ろにいたのでは、話が聞きにくいし、絵も見づらい。また、同じ保育者の側でも、左手側は絵本の話の終わり、右手側が一番最初に次の絵の話が聞けると思つたのではないか、というのが参加者たちで話しあつたことでした。

この子の行動は、なぜ? というと、後ろにいたのでは、話が聞きにくいし、絵も見づらい。また、同じ保育者の側でも、左手側は絵本の話の終わり、右手側が一番最初に次の絵の話が聞けると思つたのではないか、というのが参加者たちで話しあつたことでした。

最後に紹介するのは、赤ちゃん絵本と呼ばれる、ディック・ブルーナの『ちいさな うさこちゃん』（福音館書店）。「なぜ、うさこちゃんはいつも前を向いているの?」「それはね、赤ちゃんの右手側に立つて、絵本をのぞきこんだのです。